

## 令和3年度第2回静岡県公立大学法人評価委員会（静岡県立大学）

日 時	令和3年8月4日（水）10時00分から10時25分まで
場 所	web会議（Zoom）
出席者 職・氏名	〈委員〉 櫻井透（委員長）、伊東幸宏（委員長代理）、杉村美紀、酒井範子、山本真由美 〈事務局〉 植田スポーツ・文化観光部長、京極スポーツ・文化観光部長代理、吉良総合教育局長、 手老大学課長 他

### 議題1 令和2事業年度の業務実績に関する評価について（静岡県公立大学法人）

### 議題2 運営費交付金に反映する成果指標の判定について

事務局が資料1～4に基づき説明し、その後質疑を行った。

#### 【質疑・意見の概要】

#### ○評価案、成果指標の判定について（議題1、2）

##### <伊東委員>

- ・数値目標を上回って達成した項目に高い評価（S, SS）をつける時は、目標値に対してどのくらい上回ったら「S」になり、「SS」になるのか、評価を安定させるためにも（おおよそで良いので）基準を定めておいた方がよい。
- ・今回のTOEICの目標スコアについてS評価に上げるのは妥当であると思う。

##### <櫻井委員長>

事務局で案を作成するという事でよいか。

##### <手老大学課長>

検討する。

##### <杉村委員>

- ・（A評価をS評価に変更した）TOEICの点数について、満点は990点であり全国の平均は580～600点といわれる。多くの大学は600点くらいを目標に掲げている。英語学科の学生などは、700、800点を目標とするところもあるが、そうした中で今回の県大の結果は立派なものだと思う。
- ・資料4の中で今回はコロナの影響で判定が難しい項目として、「留学生等受入人数」とがあるが、文部科学省の見解では、コロナ禍の場合、オンラインで受講して単位を取得した場合には、留学生としてカウントしてよいことになっている。令和2年度の評価はこのままで良いが、今の状況が来年も続くと思われるため、大学側にこういった状況も伝えていただいてもよいのではないかと。
- ・大学院博士後期課程の入学定員充足率で数値目標を達成できずに「×」がついているが、変遷を見ると前年は70%程度だったところ、96%ぐらいまで持ち直している。充足率については全国の大学が難儀している項目の一つで、国立大学でも難しい状況。その中であって県立大学は健闘しているし、今後期待したい。

<櫻井委員長>

オンラインで単位を取得した学生を留学生としてカウントする、という考え方は令和3年度の実績評価から取り入れていただくよう配慮をお願いします。

<手老大学課長>

オンラインで単位取得をした留学生をカウントするとどれくらいの人数になるのか、ということも含めて大学に確認した上で検討していきたい。

<酒井委員>

- ・全体の評価「順調に推移している」は妥当であると思う。
- ・成果指標で新型コロナウイルスの影響で達成が困難だったものについては、達成状況を「－」で表記して、評価から外すという対応には賛成。
- ・海外からオンラインで単位取得する学生は静岡産業大学にもいる。
- ・私の身近に大学職員で育児休暇を取得しながら博士課程に通っている方がいる。コロナ禍で余裕がない方もいらっしゃると思うが、色々な方法で時間を作り、ステップアップにつながるような努力をしている方もいらっしゃるということを申し上げておきたい。

<伊東委員>

- ・博士課程の定員充足については、大学院全体の充足率だけで研究科ごとの充足率が出されていない。研究科によっては大きく欠員が出ているとか、あるいは過員がでていたりとか、そういう事がないか心配している。研究科ごとの充足率も出した方がいいのではないかな。

<手老大学課長>

確認の上、委員の皆様にお伝えする。

<櫻井委員長>

- ・県立大学では評価方法を変えたことで、評価する我々と評価される大学側の意向が一致し、大学の自己評価についても違和感なく受入れることが出来たと思う。
- ・県大の評価については、事務局の案のとおりとするということによろしいか。

<各委員>

(異議なし)

<櫻井委員長>

特に意見がないようなので、議題1、議題2について事務局案のとおり承認する。

## 令和3年度第2回静岡県公立大学法人評価委員会（公立大学法人静岡文化芸術大学）

日 時	令和3年8月4日（水）10時25分から11時00分まで
場 所	web会議（Zoom）
出席者 職・氏名	〈委員〉 櫻井透（委員長）、伊東幸宏（委員長代理）、杉村美紀、酒井範子、山本真由美 〈事務局〉 植田スポーツ・文化観光部長、京極スポーツ・文化観光部長代理、吉良総合教育局長、 手老大学課長 他

### 議題3 令和2事業年度の業務実績に関する評価について

### 議題4 運営費交付金に反映する成果指標の判定について

事務局が資料5～8に基づき説明し、その後質疑を行った。

#### 【質疑・意見の概要】

#### ○評価案、成果指標の判定について（議題3、4）

##### <伊東委員>

- ・自己評価Aから変更した部分が多いが、概ね妥当だと思う。ただ、大学と評価委員会では評価がずれてしまったことについて、評価の結果だけではなく、どのような考え方で評価を変更したのかを大学側には十分に説明してほしい。
- ・成果指標の就職率の判定欄は●になっている。確かに目標100%に対して実績は92.6%なので、しょうがないというところであるが、現実的には100%を達成するというのはかなり困難である。目標は100%とせざるを得ないと思うので、100%のままとするなら、目標難度の欄は「困難」にしたほうがいいのではないか。先ほど県立大学の数値目標についても概ねの判定基準を設けた方がいいという話をしたが、例えば困難目標なら95%達成できたら良しとする、というのもありうるのではないか。

##### <櫻井委員長>

- ・評価する側とされる側の意識のずれというのは、大変重要な問題だと思う。まず事務局から11項目の評価を下げた背景などを大学に説明して、もし納得いただけないようであればもう一度大学と評価委員との面談の機会を設けるなどの対応をとってもいいと思う。

##### <手老大学課長>

- ・本日の結果については、各大学に評価の内容を含めて説明する。その上で大学側から意見等があるようであれば、委員会を改めて開くかどうかは別として、随時、委員の方々にお伝えする。

##### <櫻井委員長>

- ・伊東委員の2点目の御指摘である、成果指標の難易度の考え方について。公立大学という組織の性格上、就職率の目標を100%に置かなければならないのかもしれないが、難易度が高いので、他の項目とは別の判定の考え方を導入したらどうかという御意見だった。事務局で検討していただけるか。

### <手老大学課長>

- ・成果指標の数値目標については、運営費交付金の額に反映させるものであるため、当課だけで判定の考え方の変更を判断出来るものではないが、目標数値が達成できなくても十分な取組や特筆すべき取組を行っている項目については、○と判定している項目もある。就職率は明確な数値が結果として出ているため、今回はこの判定案としたが、伊東委員のおっしゃった、困難目標では何%までなら良しとするという別の判定の考え方について、今後の課題として検討していく。

### <酒井委員>

- ・資料7の4ページで、教員のLMS(学習管理システム)利用率が向上したとなっている。令和2年度の場合は、コロナ禍で遠隔授業を展開する上で、急速にシステムの利用を始めざるを得ない状況だったと思う。5ページでは、学生アンケートの回答率があまりよくないとなっているが、先生方がより良い遠隔授業を展開しようと努力をした結果、学生がどう思ったか、アンケートを通して学生の意見を聞くことで、先生方が授業を見直し、授業環境の改善を図る機会となる。
- ・オンライン授業は学生からの質問が増えるなどの良い面もあるが、学生同士のコミュニケーションが図れない、お互いの顔が見えない授業となってしまう等の問題点も多くある。新しい中期目標では、遠隔授業と対面授業の両方の長所をフルに活かして、コロナ禍において授業環境がマイナスの方向に変わってしまったのではなくプラスの方向に持って行くことが必要。そのためには、学生の反応は十分に聞かなければいけない。評価案でアンケートの回答率の向上に対して書いているが、授業内容の向上とアンケートの回答率の向上を関連付けて取組んで行ってほしい。

### <櫻井委員長>

- ・酒井委員の指摘は次の議案である中期目標の策定にも関連してくる。これからはアフターコロナの新しい生活様式にどうやって対応していくかを考える必要があり、それは大学だけでなく世の中全体がテーマとしている。それを進めるためにも、まずは授業環境の変化に対する学生たちの反応を確認しなければならない。

### <杉村委員>

- ・今回の議案に異存はない。
- ・成果指標の志願倍率の達成状況で×がついてしまっている。ほぼ全ての全国の大学で志願倍率が下がっており、首都圏の主要私立大学でも前年と同じ受験者数を確保したところは本当に少ない。大きな大学でも1割から2割下がっているところも多くある。コロナの影響が出ているが、逆に言うと、静岡文化芸術大学ではオンライン説明会や相談会を行ったこと、人数は少ないがオンライン入試を行ったことなどにより、これぐらいの率の低下で踏みとどまることができたと思う。大学の努力の成果が出ている。何もしなかったら下がっていた可能性もあるのではないか。県立大学、静岡大学と共同でWeb出願を実施した点もよい。

- ・数値をどう読んでいくかは難しい。先ほど伊東委員もおっしゃっていたが、就職率100%というのは実際にはありえない数値であり、今回の文芸大の92.6%も、他の大学と比べれば悪いものではない。今後、数値目標を設定する際には、どういう意図で設定するのかを大学にも考えてもらい、100%が当然だからということで設定するのではなく、大学にとって建設的な目標を設定してもよいのではないか。
- ・ひとつ伺いたいのが、評価書等を見ると全体的に前向きな評価をつけているのに、交付金予算への反映の結果として減額になってしまうのは、どういった算出で出されたものなのか。

#### <手老大学課長>

- ・成果指標内で項目ごとに、◎、○、●という判定が割り振られていると思うが、これをそれぞれ2点、1点、0点と点数化する。交付金の費目別に、それぞれの平均値を算出し、その平均値によって交付金の増減率が変わる。来年度の運営費交付金を算定するときに、各費目にこの増減率を乗じて算出する。

#### <杉村委員>

- ・全体的な評価と、成果指標の判定の結果の差に違和感があったので質問した。大学側には丁寧に説明してほしい。

#### <櫻井委員長>

- ・先ほどの評価の基準の意識の違いも含め、大学にはきちんと説明してください。
- ・文芸大の評価について、事務局の案のとおりとすることによろしいか。

#### <各委員>

(異議なし)

#### <櫻井委員長>

- ・特に意見がないようなので、議題3、議題4について事務局案のとおり承認する。

## 令和3年度第2回静岡県公立大学法人評価委員会（公立大学法人静岡文化芸術大学）

日 時	令和3年8月4日（水）11時00分から11時40分まで
場 所	web会議（Zoom）
出席者 職・氏名	〈委員〉 櫻井透（委員長）、伊東幸宏（委員長代理）、杉村美紀、酒井範子、山本真由美 〈事務局〉 植田スポーツ・文化観光部長、京極スポーツ・文化観光部長代理、吉良総合教育局長、 手老大学課長 他

### 議題5 第3期中期目標（案）について

事務局が資料9～11に基づき説明し、その後質疑を行った。

#### 【質疑・意見の概要】

#### 第3期中期目標について（議題5）

##### <櫻井委員長>

- ・杉村委員にお聞きするが、文芸大と先生の大学とは性格も異なり、求められるものも違い、大学として中期目標で目指している所についても異なっていることは承知した上で、東京にある国際的な大学としての視点から、今回の文芸大の中期目標案に何か補足する点、付け足す点はあるか。

##### <杉村委員>

- ・基本的には、包括的に書かれており、国全体で動かそうとしている高等教育の動きにもよく合致していると思う。
- ・最近の大きな方針として、各大学の独自性を生かしつつ、国立大学は国立大学、私立は私立、そして公立は公立らしい特性を出していくこと求められているように感じる。目標案の中に、そういった日本全体の流れの中で作っていく部分と、浜松という環境にあることを生かした形で作っていく部分の両方が含まれていてよいと思う。
- ・特に文言を付け加えてほしいということではないが、浜松は、全国でも特徴的な、外国に繋がりがあがる多くの人が居住していたり、働いている地域であるため、今後期待するのは、地域に住んでいる外国籍の方々と交えた多文化共生、グローバルとローカルを合わせたグローカルとも言ったりするが、そういったことを実践しやすい位置づけを持った大学であるので、充実させてほしい。
- ・県内の大学だけでなく、全国の高等教育機関との連携も深めてほしい。
- ・全国に795校ある大学の中でも、文化芸術を非常に重視していて、さらに文化政策という学科がある公立大学というのはたぐいまれな存在だと思う。こういった特性を活かして展開していくことが大事。このようなプログラムを学費の安い公立大学で提供している意義は学生にとっても大きい。さらに浜松という地域の多文化的な環境を生かした教育が実施できることは良いことだと思う。今後デジタルトランスフォーメーションを展開する時も、こうした文芸大の要素を組み込んで進めてほしい。
- ・資料11の一番最後に、SDGsの推進という記載がここにだけ出てくるが、SDGs

というのは今申し上げた多文化共生、多様性への配慮、危機管理、ガバナンスなど全てに関わってくるので、もっと全体に意識して記載してもいいのではないか。

#### <伊東委員>

- ・資料11の序文で、他大学との連携による教育研究の質の向上について書かれているが、この大学間連携が教育研究のところでは触れられず、地域貢献の部分に収まっている。同じ書き方でもいいので、教育と研究の目標の中にも入れることはできないか。

#### <手老課長>

- ・同じ表現になるかもしれないが、記載する。

#### <伊東委員>

- ・県内大学との連携を強化すると書いてあるが、県内に限る必要はない。全国あるいは海外大学との連携も今後は考えていただきたいので、県内に限定するような書き方ではない方がいい。
- ・資料11の6ページの広報の充実という欄に、「憧れをよぶ大学」という表現があるが、これは文芸大から言い出した表現なのか。

#### <手老課長>

- ・元は「選ばれる大学」という記載だったが、大学側は選ばれるという表現に違和感を感じていたため、大学との調整の中で大学課が修正した。もし適切な表現があったら御教授願いたい。

#### <伊東委員>

- ・他に何が適切か、というのは思いつかないが、「憧れ」というのはどちらかというと受験生目線になる。社会や地域の人が、大学を大切な存在だと思って、活用して、感じて、一緒に成長していきたいという気持ちになったとしても、それは憧れという表現にはならない。違和感を覚える。

#### <手老課長>

- ・その表現については、再度検討する。

#### <酒井委員>

- ・資料11、6ページの最後に、SDGsについて記載がある。このSDGsという言葉が中期目標の中にちりばめて記載することまでは必要ないと思うが、持続可能な社会の実現を目指す、その先陣を切っていくという意味合いの文言を、もう一カ所ぐらいは入れてもいいと思う。例えば、序文の中に持続可能な地域社会のあり方を模索しているとあるが、この部分でSDGsを取り扱ってもいいのではないか。
- ・2ページの教育内容の項目で、オンライン方式と対面方式を組み合わせた教育について触れられているが、双方のメリットを活かし、オンラインと対面を織り交ぜて、ベストミックスな新しい教育方法を実施する、というもう一步踏み込んだ表現として記

載してもいいのではないかと思った。

- ・ウィズコロナ・アフターコロナの中で、文芸大を感染症のようなものにも負けない大学にしていく、という意味合いの文言を入れたいと思い、今の意見を述べた。大学の教育現場で一番混乱したと感じたのは、やはりこの授業の実施方法の点だったので、両方のメリットを生かした教育をもう一度考えてほしいと思った。

#### <櫻井委員長>

- ・コロナに端を発する社会の有り様の変化に対して、大学としてどう向き合っていくかということが大学経営そのものに直接関わってくる。それに対してどう取組んでいくかということ、中期目標にふんだんに盛り込んでいただかないと、大学の経営が難しくなる観点から、積極的に取り組んでいただきたいということを述べていただいた。

#### <山本委員>

- ・多岐にわたる目標が掲げられており、どれもやっていただくと良いことだと思うが、文章に強弱をつけて記載すると、大学側は取り組みやすいのではないかな。

#### <杉村委員>

- ・SDGsという言葉をもう少し多く盛り込むことについて、一つのアイデアを述べたい。「グローバル人材」はよく使われる言葉だが、実際にはどういう人なのか伝わりづらい。「持続可能な社会の担い手をつくる」という表現が、去年から小中高校の学習指導要領に全て入れられ、今これを元にカリキュラムが動き始めている。
- ・高大連携の観点からも、資料11の序文にある、「グローバルな視野と地域の視点を併せ持ち」という部分に「持続可能な社会の担い手づくり」の表現入れることで、高校の先生等にすごく響く文言になる。大学では、この点について、これまであまり取り組めてこなかったという反省も出ているので、こういった文言を入れてもいいのではないかな。

#### <櫻井委員長>

- ・「グローバル」という言葉は、今の第2期中期目標を作る頃に流行っていたのだと思う。時代が変わって、これからの中期目標・計画を作る上では、SDGsを入れていくのが世の中の流れと思われる。

#### <杉村委員>

- ・まさにそのとおりで、「グローバル」と同時に「国際化」という言葉もよく使われていた。今はポスト国際化をどう考えるか。今は「インターナショナルライゼーション アットホーム (Internationalization at Home)」ということが言われていて、アットホームというのは、「国内で」という意味。海外とオンラインでつながれば、海外に行かなくても学べることもある、逆に海外へ行かないと学べないことがある。これを組み合わせることを、ニューノーマルな学び、新しい伝統の学び等、いろんな言い方をしているが、私たちも新しい学びの形を模索できるといいと思う。

#### <櫻井委員長>

- ・議案とは直接関係ないが、最近気づいたことを敢えて申し上げたい。SDGsというのは曖昧模糊としていて非常に大きな目標だが、具体的な個々の目標に置きなおしてみると、現行のシステムに大きな変更を求められることが実感できる。  
例えば、浜松にはいろんな産業が形成されているが、基本的には鍛冶屋（鋳造鍛造）の商売が基礎になっている。つまり熱処理に関する仕事であるが、熱処理には多くのエネルギーが消費される。  
SDGsのもとでカーボンニュートラルの考え方が入ってきて、いかに熱処理のエネルギーを減らしながら、同等の強さ・クオリティーの部品をつくれるか、というのを考えなければいけなくなっている。新しい製造技術、新しい材料などを開発しないと鉄工所から発展していった浜松の産業は、非常に大きな影響を受けてしまう。
- ・SDGsから派生してくるいろんなものを今後の大学の経営の中期目標の中にどう取り込んでいくかというのは、非常に大きな観点じゃないかと感じている。
- ・他に何か意見はあるか。

#### <各委員>

(特になし)